

# 福島の見えない放射能と安心の言葉

内山田 康

# 福島の見えない放射能と安心の言葉

内山田 康

## 福島の浜通りへ

私は2013年9月になって原発事故後の福島を始めて訪れた。2011年のゴールデンウィークに三陸を訪れて以来、私は石巻（特に牡鹿半島）と気仙沼を中心に調査を行い、津波が来た際に人々が頼りにした津波の知について調べていた。まず気づいたことは、三陸の生活世界には性質の異なる二つの津波の知が存在していたということだった。一つは防災マニュアルの知。もう一つは浜の生活が継承してきた津波の知だ。前者は長い持続における環境ではなく行政が置かれた直近の状況を前提とした危機管理システムであり、その想定は実際の津波の威力と大きく乖離していた。これは社会と環境を人工的に分離してコントロールする方法であり、基準とインフラストラクチャーの構築に関わった組織による世界の知覚と利害が、津波の想定に影響を及ぼしていた。後者においては海と陸が交叉する浜の環境の中で生まれた世界の知覚、身体化した有形無形の津波の伝承、そして浜の小高い場所にある神社や寺院のトポロジーが潜在的に繋がった状態で密やかに存在していて、津波が襲来した際にそのネットワークが顕在化して浜の環世界の中の人々の身体感覚を通して作動したとすることができるだろう。三陸の漁師たちは、このような環境の中で蓄積された暗黙知に導かれて津波が来る前に漁船を沖に出すことができたし、この感覚に従って津波警報が予測した津波の高さを疑い、より高い場所へ逃げることもできた人々も多かった。また津波に飲み込まれた時に命を救ったのは、浜の、そして海の身体知だった。

遠洋漁業に長く携わっていた石巻に住む私の遠縁のHさんは、津波が襲ってきた時、漁港の近くにあった自宅の玄関口にて、片手に犬を抱いて車に乗り込もうとしていた。黒くて大きな津波がものすごい勢いでやってきて飲み込まれたが、とっさに片方の足を玄関柱に絡ませたので流されなかった。どうしてとっさに足が使えたのかと聞くと、海上で台風が来た時にデッキの突起物に足を絡ませて流されないようにしていたからだという。それから4年後、私は福島の小名浜漁港で石巻出身の遠洋漁業の漁師に会った。彼は石巻で津波に流された時のことを話し始めた。車で逃げようとしたが渋滞で車が進まず津波に飲み込まれたが、車が水に浮いて流された。しばらく漂っていると、陸が近づいたので車を捨ててそこまで泳いだ。「助けてください」という声が聞こえたので、女の人を引き上げて助けた。その女の方は泣いていた。津波に飲み込まれた時、

握っていた子供の手を離してしまったという。漁師は「津波が来たら手握ったくらいじゃ流される。その女の人は子供を股でグッと挟んでいれば子供は助かった。股の力は手と比べ物にならないくらい強いから…」と言った。

三陸沿岸の津波の被害の大きさは、私たちの想像を絶するものだった。しかし、漁師たちは意外に前向きだった。翌年になると魚港や水産加工施設は急ピッチで再建されて行った。気仙沼や石巻では、まぐろ、かつお、さんま、さば、いわしが水揚げされた。牡鹿半島では養殖が再開した牡蠣の稚貝が成長して、浜には活気が戻り始めていた（内山田 2013）。私は復興する様子が見えない福島が気にかかっていた。福島の浜では海の放射能汚染のために、試験操業さえも未だ始まっておらず、漁港はどこに行っても閑散としていた。私は三陸での調査を切り上げて、福島の浜通りに通い始めた。

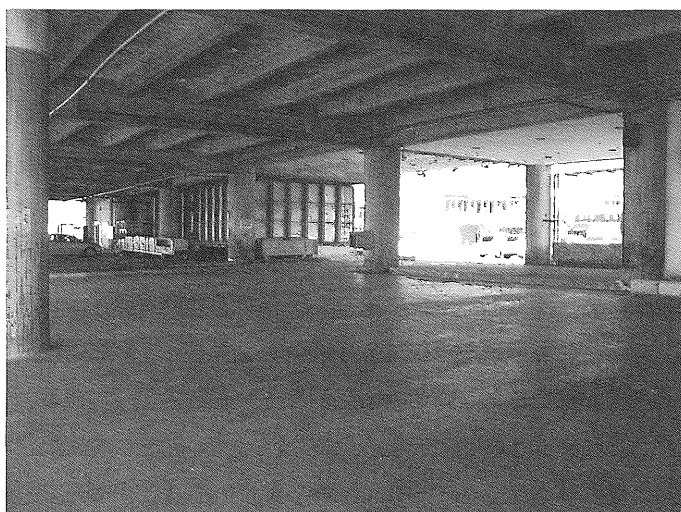


写真1. 誰もいない小名浜魚市場

東日本大震災が起きてから2年半が過ぎた9月中旬の朝、小名浜漁港に漁船が一隻戻ってきた。乗っているのは船長と乗組員の二人だけだった。漁船が岸壁に係留すると軽トラックが一台やってきた。乗組員が、甲板からフジツボのついた小さなタイヤ一つと曲がった鉄筋一本を軽トラックの荷台に積み込んだ。乗用車でやって来た船主らしい人が、二つの瓦礫の写真を撮って作業は終了した。これは水産庁が行っていた「瓦礫の撤去による漁場の再生および漁業の再開」を目的にした支援事業だった<sup>1</sup>。20トンの底引き網漁船が、タイヤ一本と鉄筋一本の瓦礫を撤去したこの作業には、「早期の漁業再開」に向けて、あるいは「本格的な漁業の復興」へ向けて、どのような

<sup>1</sup> 一人当たり1日12,100円、一隻当たり21,000円から92,500円がトン数に応じて払われた。

効果があるのか。この瓦礫の撤去は、漁場からどれだけの量の瓦礫を回収したかではなく、瓦礫の撤去作業をしたという証拠を作るのが重要になっているように見えた。これは原発事故のために漁業が再開できない漁師に、補償を出すための証拠品なのだろう。だが補償を貰える人と貰えない人がここにもいた。船主には様々な形で補償が出ていたが、船主に雇われた「乗り子」の補償は殆どなかった。(同様に、避難区域で家を持つ人とアパート暮らしの人に対する補償金には雲泥の開きがあった。)



写真2. 底引き網漁船が撤去した瓦礫を積んだ軽トラック

小名浜港は福島第一原発から南に55キロ離れた巨大な工業港で、小名浜漁港は工業港の東側にある。アクアマリンふくしまと三崎公園に挟まれた地区には、魚市場、製氷工場、魚料理を出す食堂、造船所、水産試験場などがある。魚市場近くの奥まった場所にはソーブランド街が広がっている。これも大きな港町らしい機能だ。私はこの歓楽街の手前の旅館に何回か泊まったことがある。宿泊していた人たちは港湾の工事や除染作業に携わっている人たちで、旅館は飯場のような場所だった。食事に遅れると味噌汁を入れた大なべは空になっていた。漁港の旅館であるにもかかわらず、夕食に出てきた秋刀魚は飼料用のものらしく、頭が切り落とされた小さなものだった。金曜日の夜になると旅館の味気ない夕食を食べる人はほとんどいなかった。皆遊びに出ているようだった。

小名浜漁港から西に6キロ離れたJR泉駅前のホテルに泊まった時も、そこは工事関係者でいっぱいだった。その中には石巻から移動してきた作業員たちもいて、ダイバーとして働きたいと話していた若い作業員に対して、年配の同僚が「どこに潜らされるかわからないから止めておけ」と言った。小名浜、中之作、四倉、久之浜では港湾工事が行われていた。福島第一原発の港湾で

も工事が行われることになっていた。当時は海に漏れ続ける高濃度の汚染水が問題になっていた。海底のホットスポットの存在も知られていた。久之浜のある漁師は、海水の放射線量ではなく、ホットスポットがある海底の土砂の放射能汚染を心配していた。このような状況の中でダイバーとして働くことは危険だと年配の作業員は考えたのだろう。水が放射能を遮断するから、ダイバーは被曝しないという「科学的」な言説も流布していた。しかし、科学的な立場は多様だから、通俗に対する科学という図式は当てはまらない。原発推進派寄りの研究者と、原発反対派寄りの研究者とでは、被曝についての基本的な考え方が全く異なっていて、両者の間には対話が成立していない（一ノ瀬他 2012; 内山田 2014）。

人類学的かつ「羅生門」的な視点から問い直してみよう。原発は科学的に運転されているのだろうか。除染は科学的に行われているのだろうか。短い答えは否である。1967年に制作された日映科学映画製作所の『黎明—福島原子力発電所建設記録 調査編』は、福島第一原発が日本の高度な科学技術の粋を尽くして建設されたという英雄叙事詩的な物語になっている。だが、原発の建設工事現場で作業員として働いた後、クレーンの免許を取って東芝と日立の下請けとして働いた榎葉町のMさんによると、工事の実際はかなりいい加減だったらしい。現場監督が見ていない時、Mさんは仲間と山で花札をした。現場監督が戻ってくる時間は判っていたので、それよりも前に仕事に戻り、現場監督がいなくなるとまた山に戻って花札に興じた。原子炉格納容器は工場で作られ、現場で組み合わせたのだが、うまく合わなかったために無理やり溶接していた。これを見てMさんはこんないい加減なことではいいのかと思ったという。Mさんは後により給料が高いクレーンの運転士になり、燃料棒の搬入と搬出を行うようになった。作業中は線量計のスイッチを切り、作業が終わるとスイッチを入れて戻ってきた。以下で詳しく述べるように、インフォーマントたちによれば除染の見かけと実際は異なっている。原子力発電所の運転に関わる多種多様の作業を行っているのは科学者ではなく作業員たちだ。除染作業をしているのは科学者ではなく作業員たちだ。その含意は、原発の内外で行なわれている作業の多くは、理想的な実験室のプロセスよりも、工事現場の仕事のやり方に近いということだ。

1971年に制作された『黎明—福島原子力発電所建設記録 工事編』を見ると、福島原子力発電所がどれほど安全であるかが繰り返し説明されている。建設予定地は地震と津波と台風の被害を経験したことがない場所だという（事実と反した）前提になっている。ナレーションは「発電所の周りでは放射能の影響は全く考えられません」という。Mさんによれば、事故で被曝した作業員がいた。また原発の近くで奇形児が生まれたことがあり、この時は事実を公表せずにお金で解決した。小名浜の知り合いも別の機会に、いわきの共立病院には以前から被曝した作業員が運ばれてくることがあったと教えてくれた。

## 浜通りに通う

久之浜は福島第一原発の南30キロの地点にあり、原発事故後に閉鎖されなかった漁港の中では1Fに最も近い。私は小名浜と久之浜を起点にして、そこから徐々に関係を広げていった。双葉郡の町だった久之浜町は1966年にいわき市に合併している。このような前史のために、久之浜は半ばいわき、半ば双葉のような場所の性格を持っている。福島第一原発が作られた時、久之浜は大隈と富岡と共に第一原発のすぐ前にあった漁場の漁業権を放棄して補償を得ていた。それもあって、直接の補償を得ていない久之浜の5キロ南にある四倉漁港との関係は良好ではない。原発事故後に、久之浜と四倉の魚市場を一つにする話が持ち上がっていたが、反対する人たちが多く、計画は進展していない。久之浜が双葉の一部だったことや、原発が建設された時に補償を得ていた前史が、久之浜と四倉の関係に影を落としている。

2016年7月と8月が休漁期間だった久之浜では、9月から瓦礫の撤去を再開することになっていた。8月11日に久之浜漁港では盆踊りと花火大会が開かれた。3年前に話を聞いた漁師のAさんが、祭り実行委員会本部のテントに座っているのが見えた。魚市場は取り壊されて久しいが、新しい魚市場がどこになるのか未だ決まっていない。試験操業で水揚げされた魚は小名浜漁港の魚市場まで陸路運ばれ、スクリーニングを受けてから出荷される。スクリーニングが実際にどのように行われているのかについては、実際に見ていないので分からない。

福島県漁業協同組合連合会の「産地魚市場におけるスクリーニングマニュアル」(2015年)によれば、「試験操業においては、水揚日毎、相双 [相馬・双葉]、いわきの検査所毎に1魚種1検体以上採取する。ただし、水揚日が異なるものを短期間蓄養し、同一日に出荷する場合においては、出荷日に1魚種1検体以上検査することも可能とする。」スクリーニングの測定下限値は「12.5Bq/kgを下回るように測定する」とある。2016年9月23日に出された「試験操業漁獲物の検査結果」によれば、2016年に入ってからセシウム134 + 137が検出されたのは以下の3件だ。

マダラ	2016年2月17日	四倉沖	15.8 ± 9.8 Bq/kg
アカガレイ	2016年2月17日	四倉沖	14.1 ± 9.7 Bq/kg
ヒメエゾボラ	2016年4月14日	久之浜	13.5 ± 9.7 Bq/kg

他は不検出だったのだが、検出下限値は多くの場合およそ10Bq/kgに設定されている。不検出の魚は安全だとされるが、不検出の基準の根拠は何なのだろう。上掲の「スクリーニングマニュアル」によると、「測定下限値は、自主基準値である50Bq/kgの4分の1の12.5Bq/kgを下回るように測定する」とある。福島県のホームページの「ふくしま復興ステーション」の中の「水産物の検査体制」によれば、一般食品の国の基準値は100Bq/kgであるが漁業協同組合の基準はその2分

の1の50Bq/kgに設定されている。国の基準値の半分を基準にしたから安全だという（通俗的な）考え方だ。福島民報によると、福島第一原発の20キロ圏内では、三陸沿岸では平成25年度で終了した「漁場復旧対策支援事業」が平成28年8月上旬から始まることになっていた。久之浜の漁師たちは、20キロ圏内（5キロ圏内を除く）の瓦礫を引き上げて、久之浜漁港に保管するという（福島民報2016年7月26日）。

8月11日の午後、久之浜漁港は祭りの会場となり、仮設商店街に入っていた店の人たちと子ども会が露店を出していた。婦人会のフラダンスからプログラムが始まった。外部の人たちも来ていて、久之浜漁港は珍しく賑やかだ。実行委員会のテントの中央に陣取っていたAさんによると、三つの漁協の支所を一つにしようという話があるがまだ何も決まっていならしい。瓦礫の回収は8月ではなく9月に始まるという。ここでは復興に関わることは全てが遅れている。震災から5年以上経つのに、福島第一原発の汚染水問題は未だに解決していない。台風が来る度に、高濃度の汚染水が海に流出する。もうすぐ20キロ圏内の瓦礫の回収が始まろうとしている。震災前はアワビを採っていたYさんは、瓦礫の回収は面白くないという。アワビを採っていた頃は「誰にも負けねー」と頑張っていたが、瓦礫の回収にはその面白さがない。

久之浜では防潮堤と道路と橋をかさ上げる工事が進んでいた。災害公営住宅は完成したが、空き部屋が残っている。防潮堤で守られた新しい区画には商店街も作られるがテナント料が高いため私の知り合いが経営する食堂は、商店街には入らない。祭りに会場には若者や子供たちが来ているが、その中には久之浜を離れた人たちもいる。試験操業の対象魚種は増えつつあるが、本操業は始まらない。魚市場がどこになるのかは未だに決まらない。試験操業と瓦礫の回収だけで久之浜の漁師はいつまで漁師を続けるのだろうか。祭りの会場のつかの間の賑やかさとは裏腹に、久之浜漁港はいつ終わるのか分からない行先の不安を抱えている。

JR久ノ浜駅から祭りの会場となっている久之浜魚港へ続く道には、手に誘導灯を持った交通警備員たちが立っていた。前を通り過ぎると笑顔で「こんにちはー」と挨拶する。中には若い女性もいる。話しかけてみると彼らは久之浜を知らない他所から来た人たちのようだった。知り合いにこのことを尋ねると、東電の社員が祭りの交通警備のボランティアをしているのだという。お盆休み前の祝日に東電の若い社員たちが警備のボランティアで浜の祭り会場に駆り出されている。挨拶をせずにそっぽを向いている東電の社員がいる。彼らも内心は複雑なのだろう。

#### 原発事故後の環境の知を巡る問い

2016年8月の3週間、私はいわき駅前のビジネスホテルに泊まり、朝は小名浜漁港前のTさんの喫茶店に行き、そこを訪れた浜の常連客たちと原発事故後の日常についておしゃべりをしてか

ら、小名浜、四倉、久之浜の三つの漁港、双葉郡の人々が家を建てた泉地区の分譲住宅、楯葉町から避難してきた人たちが住む中央台の仮設住宅などを訪ね歩いた。この夏は台風がいくつも東北に上陸した。そんな雨の日には、いわき市立図書館の震災コーナーの窓際の机で、録音したインタビューを聞き直したり、原発事故関連の資料を読んだりして過ごした。双葉郡からいわき市に避難しているインフォーマントたちに連れられて、広野町、楯葉町、富岡町、大熊町を訪れたこともあった。夜には久之浜出身のNさんがいわき駅前で経営するパブに何度か行き、常連客たちと話をした。その中の一人のOさんは子供の安全を案じて浪江町から諏訪市に避難していた。Oさんは月曜日から金曜日まではいわきの駅前のホテルに泊まって浜通りで仕事して、週末に家族の元に帰って行った。NさんとOさんは無期限の休校が決まった双葉高校の卒業生だった。Oさんに連れて行かれたバーに居た男女の客たちは全員浪江町の町民だった。いわき市には避難して来た人たちのディアスポラがいくつもあった。

私には昨年辺りから気にかかっていることがある。以前からその傾向はあったのだが、復興がますます強調されるようになる一方で、放射能の不安を口にすることが憚られるような雰囲気が強まってきているのだ。福島県の二つの地方新聞である『福島民報』と『福島民友』の紙面は復興のテーマを中心に紙面が構成されるようになってきている。放射能汚染の問題は、新聞を読んでも良く分からない。除染作業をしている人から報道されていないことを聞くことがあった。2015年5月に久之浜で富岡町の除染をしていた人が「いくら除染しても線量が下がらない」と言っているのを聞いた。彼は「何か漏れているのかな」と付け加えた。このような危惧は記事にならない。報道が取り上げる主要なテーマは復興と帰還と風評被害の払拭だ。汚染水は流れ続け、廃炉作業も進んでいないにもかかわらず、復興が合言葉のようにになっている。スーパーサイエンスハイスクールも、福島を安全を伝える活動に力を入れている。

2016年1月のある日、私は小名浜の知り合いからホッキ貝を分けてもらった。彼は南相馬のホッキ貝を貰ったのだという。浜の人たちは「分け漁」をしていたが、原発事故後は行われなくなっていた。私は分けてもらったホッキ貝を久之浜の知り合いの食堂に持って行き、そこで分けた。「りっぱなホッキ貝だね」と褒められた。ホッキ貝は刺身と炙りにして皆で食べた。この時、店には近所に住む女性と6歳の娘が来ていた。女性は娘に「美味しいから食べる？」と聞いた。娘は「貝は嫌いだからいらぬ」と答えた。原発事故から3年が過ぎた頃から、人々は地元で採れたタケノコ、山菜、魚を再び食べるようになっていた。三世代で食卓を囲む家庭では、皆「孫には食べさせない」と言っていたが、孫が本当に食べないかどうかは不明だった。2015年5月に小名浜を訪れた際に、「孫には食べさせないと言っても同じ食卓で食べるのだったら、孫も食べることがあるんじゃないですか」と聞いてみた。何人かが「そうだねー」と曖昧な返事をした。だからこの母親が幼稚園に通う娘にホッキ貝を食べさせようとしたのを見た私は、地元で採れた



野菜や魚を子供に食べさせているのかどうか彼女に聞いてみた。彼女が言うには、原発事故後しばらくの間は食べるものには気をつけていた。生鮮食料品は県外のものを買った。水もペットボトルの水だけを飲ませた。しかし、2年半を過ぎた頃からあまり気にしなくなったという。イノシシの肉を食べている人も増えているようだ。楯葉町出身のいわき市役所職員と湯本に住み避難指示解除になった町で内装工事をしていた男性は、イノシシの肉を食べたと私に話した。

ホッキ貝が試験操業の対象種に加えられて初めて水揚げされたのは2016年6月3日のことだ(福島民報 2016年6月4日)。しかし、私がホッキ貝の分け漁をもらったのは1月14日だから、試験操業が始まる以前から浜ではホッキ貝の分け漁は再開していた。畑で採れた野菜や海で釣った魚は孫には食べさせないとインフォーマントたちは言っていたが、実際は食べている子供たちもいたと考えられる。いわき駅前でパブを経営する久之浜出身のNさんは次のように言った。久之浜に住むNさんの両親が家で作った野菜を送ってきた時に、「悪いけど野菜は捨てるよ。子供には食べさせられないから…」と彼は伝えたという。また別の機会に子供を両親に預けた際に「絶対にここのものを食べさせないで」と念を押した。Nさんは小名浜出身の妻と2歳の子供といわき駅の近くに住んでいる。彼の家では原発事故から5年過ぎても食料品はインターネットで福島県外のものを買っている。

## 数字の二重性

楯葉町は2015年9月5日に避難指示解除になった。その当日、楯葉町の元町議で東電の協力会社の社員として福島第一原発で働いていたAさん(当時75才)が、町の道路脇の土壌からセシウム137とセシウム134の合計値1キログラム当たり52,500ベクレルと34,790ベクレルを検出したとNPO法人「いわき放射能市民測定室たちね」が発表した。この検査結果は翌日の『朝日新聞』の福島県中通り・会津版で取り上げられた。『福島民報』と『福島民友』はこの調査結果を報道しなかった。Aさんはこの調査を行ったのは6月であり、「近辺の空間線量は0.3~0.7マイクロシーベルトと比較的低かった」(朝日新聞2015年9月6日)。この事実をどう考えたらいいのか。地元紙に勤務する友人によれば、地元紙は購読者やスポンサーに配慮して記事を書かなければならない。だから楯葉町の避難指示解除の初日に政権が積極的に進めている帰還に水を差すような記事は書けないのだろう。

「空間線量は0.3~0.7マイクロシーベルトと比較的低かった」とだけ書き、「道路脇の土壌からセシウム137とセシウム134の合計値1キログラム当たり52,500ベクレルと34,790ベクレルを検出した」とは書かないのが福島では普通のやり方だ。Aさんは政府と東電が発表する数字を信じていない。さらに政府が避難解除の基準を年間1mSvから20mSvに引き上げたことは間違っていると考えている。彼が福島第一原発で働いていた頃、原発敷地内の空間線量は年間1mSv以下に

設定されていた。Aさんにとって、原発事故後に、避難指示解除の基準が年間20mSv以下に設定されたことは、帰還する町や村の空間線量の基準が、原発事故以前の原発敷地内の空間線量の基準の20倍に引き上げられたことを意味している。避難指示が解除された町の中には、原発事故前の福島第一原発の敷地内よりも放射能の空間線量が高い場所になっている。

いわき市には記者が二人だけの『日々の新聞』がある。放射線量を表す数字をどう読むかについて私と話していた時、編集人の安竜昌弘さんはこの問題を「数字の二重性」と表現した。これは例えばモニタリングポストの放射線量は何を表しているのかという問題だ。その数字は実態よりも低い。(これについては以下で述べる。)安竜さんはスポンサーの意向を気にして記事を自己検閲するジャーナリズムの限界を感じて、2002年にこの小さな新聞社を始めた。『日々の新聞』の二人の記者は「復興」と「風評被害」の空気に配慮した記事は書かない。高い放射線量は住民ではなく特定の組織や利益を守るために秘密にされたことが多い (cf. 日々の新聞社 2014: 136-146)。彼らは足で歩きニュースにならない小さな声を丹念に拾いあげて記述する仕事を続けている。自分たちが書いた記事の内容によってスポンサーがいなくなることがあってもそれは仕方がないことだと安竜さんは考えている。原発事故後の環境に生きる私たちは何をどう読んだら良いのか。私たちは放射能の可視化の方法について自ら学び、異なるメディアの多様な記事を読み、事実の作られ方を意識しなければならない。

私は楢葉町の元町議で東電の協力会社の社員として福島第一原発で働いていたAさんとは、小名浜の市民放射能測定室で偶然に出会った。後日、Aさんがいわき市内に建てた新しい家に話を聞きに行くと、彼はモニタリングポストの空間線量をどうやって下げるのか教えてくれた。その方法は次のようなものだ。モニタリングポストの表土を剥いで土を入れ替える。その場所をコンクリートで舗装する。高圧水で何度も洗浄する。モニタリングポストをコンクリートの壁で遮蔽する。空間線量上がる度に除染を繰り返す。その結果モニタリングポストが表示する空間線量は周辺に比べると低くなる。Aさんは「モニタリングポストの周囲の空間線量を計測する実験をやりましょう」と言った。

Aさんは10月28日に私たち(文化人類学実習でいわき市に滞在していた2人の教員と学生たち)を楢葉町の上繁岡地区集会所と10万Bq/kg以下の放射性廃棄物の埋立処分場として使われている産業廃棄物の最終処分場に連れて行ってくれた。上繁岡地区集会所のモニタリングポストは0.265 $\mu$ Sv/hを示していたが、周囲の空間線量はそれよりも高く、私のTerra-P+は0.35 $\mu$ Sv/h前後を示していた。モニタリング・ポストのない産業廃棄物の最終処分場の入り口付近では、空間放射線量はTerra-P+では0.61 $\mu$ Sv/h、Air Counter-Sでは1 $\mu$ Sv/hを示した。公表されている10月28日の楢葉町の環境放射線量測定値が最も高い地点は波倉地区集会所0.31 $\mu$ Sv/hであり、その次に高いのが上繁岡地区集会所0.27 $\mu$ Sv/hだった(福島民報 2016年10月29日)。Aさんに案内して

もらったおかげで、楯葉町の中に放射線量がこれより高い場所があることが確認できた。このようにして私たちは『福島民報』の「県内各地の環境放射線量測定値」と『福島民友』の「各地の放射線量」に記載されているモニタリングポストの放射線測定値が一体何を示しているのかについて再考するための経験的な知について学ぶことができる。

## 仮設住宅の生活

楯葉町は2015年9月5日に避難指示解除になった。1年後の2016年8月、私はいわき市内にある楯葉町の仮設住宅を訪れた。鹿島街道から東側に折れて中央台に向かう坂道を登ると、いわき明星大学が左手に見える。その敷地内に福島県立双葉高等学校の仮校舎がある。旧制中学の時から人々が通った双葉高校は、2017年3月末に「休校」という形で閉鎖されることになった。双葉高校の仮校舎の裏手には、仮設の楯葉中学と楯葉保育園がある。坂道をさらに登っていわき光洋高校を過ぎると、木造平屋の仮設住宅の群れが見えてくる。楯葉町の町民の多くはここに避難していた。この仮設住宅は2017年3月に閉鎖されることになっていたが、楯葉町への帰還者は人口の1割に満たなかった。

この仮設住宅に妻と二人で住んでいるFさん（63）を訪ねた際に、隣の棟に住むEさん（78）が出てきた。彼女はこれから車で10分程のところにある病院に入院している夫に会いに行くのだという。私は3年前にここに来た時、仮設住宅の西側を走る道路に向かって傾斜している法面の一番上の部分が家庭菜園になっていたのを見た。Fさんは近所の人に家庭菜園で採れた野菜を貰うのだが、放射能汚染が怖いのでこっそり捨てていると言った。この野菜の送り主がEさんだ。Eさんは最初の年は何も作らなかったが、2年目から仮設住宅脇の斜面の上の土地で野菜を作っている。ホームセンターで培養土と腐植土と肥料を買ってきて、緑肥を土手の上の部分に戻して、畑を拡張している。野菜はスーパーで買った方が安いのだが、何もしないとほけてしまうのでミニトマト、唐辛子、ナス、キュウリ、かぼちゃなどを作っていると説明してくれた。楯葉では農業をしながら道の駅で働いていた。Eさんは楯葉に戻ることを躊躇している。夫はいわきの病院に入院しており、40キロ離れた楯葉から来ると1時間はかかるからだ。10月下旬に再び訪ねた際に、Eさんの夫が亡くなったことを知った。Eさんは楯葉に戻らないことを決めた。4年続いた家庭菜園はすでに放置されていた。

8月12日、私はFさんを楯葉の家に訪ねた。Fさんはいわきの仮設住宅に住んでいるが、楯葉の自宅で伝書鳩を飼っているので、毎日世話をしにやってくる。家はリフォームが終わり、いつでも帰れる状態になっていた。隣の家は荒れ果てている。ここの住人は帰ってこないという。隣の家は除染をしていないので、Fさんはその線量はかなり高いと確信していた。Fさんは自分

の家の放射線量を下げするために何度も草刈りをしている。家の前には木戸川の支流が流れている。この川の反対側は津波の被害を受けたが、Fさんの家は津波の被害を免れた。Fさんは川が津波を吸収してくれたから家が助かったと思っている。しかし、川は放射能で汚染されている。Fさんによると木戸川を「原状回復」するための除染がようやく始まるという。誰がどのようなコンテキストで「原状回復」と言っているのだろう。Fさんは口頭で「原状回復」という言葉を聞いたのだから、環境に漏れ出た放射性物質を取り除くという意味で「原状回復」という言葉が使われたとは考えられない。

福島県が除染のコンテキストで「原状回復」について書いている箇所がある。「農作物の放射性セシウム対策に係る除染及び技術対策の指針」という文書の「原状回復に係る考え方について」という見出しの下に以下のような記述がある。「反転耕や深耕の際に施用する土壌改良資材（ゼオライト）や肥料（カリ質肥料、リン酸質肥料、石灰質肥料）、たい肥の施用量については、除染により土壌の地力等が減じた分を補う原状回復分のみとなります」（福島県農林水産部 2014: 6）。ここで言う原状回復とは、除染のために表土を削り取って失われた土壌の地力を回復することだけを言っている。原発事故の前の状態を回復するとは言っていない。原状回復しなくても安全だという言説も流布していた。木戸ダムの底の泥は汚染されているが、水が放射能を遮断するから水道水は安全だという。

2016年3月29日に公表された公共用水域における放射性物質モニタリングによれば、木戸ダムの底の泥（シルト）のセシウム134と137合計の測定結果は、2015年7月9日分が17,800Bq/kg、11月12日分が10,100Bq/kgだ（環境省水大気環境局水環境課 2016）。木戸ダムから取水している富岡町のモニタリング（ダム放流水を検査）によれば、2014年12月2日から12月31日までの間、ヨウ素131、セシウム134、セシウム137は検出されていない（富岡町 2014）。ダム底から取水口まで60メートル離れているため、水道水は100パーセント安全だという。放射能で汚染された湖底の土を取り除くことは困難な上、湖底の土を取り除けば「かえって水をかき混ぜることによる弊害が大きい」（福島民報 2014年8月9日）。除染をせずに水道水を使う方がより安全だというこの選択においては、事故以前の環境との比較はせずに、除染をした場合の危険としなかった場合の安全を比較している。

2015年4月3日に放映されたNHK福島のニュースによると、木戸ダムを訪れた高木陽介原子力災害現地対策本部長は、「ダムの底の泥から放射性セシウムが1キログラムあたり最大で1万5000ベクレル検出されているものの、水面近くの水を使用している」ことなどについて説明を受け、浄水場で処理された水を飲んで安全性をアピールした（NHK福島 2015年4月3日）。政治家がパラシュート降下してきて、福島の食材を食べたり水道水を飲んだりすることで、安全性をアピールするが、福島の人たちはこれを冷ややかな目で見ている。政治家が一度だけ水道水を飲んだとしても、放射能汚染が残る土地で不安を抱えながら一生生きて行けるのか、被曝の心配をしながら

ら子供を育てられるのか、という問題の答えにはなっていない。浪江町から長野県に避難しているOさんは次のように言った。「帰るのが危険な場所には帰還させるのではなくて、100年くらい閉鎖してもいいんじゃないか」。

その日、Fさんの実家では母親の新盆を行うために兄夫婦が家に戻っていた。Fさんのお兄さん(67)は、家を建て直した1年後に原発事故が起こり、楢葉を後にした。屋敷の土地は700坪ある。仮設住宅では新盆ができないので、母親の供養に来てくれる知人たちをもて成すために三日間だけ帰ってきたのだという。仮設住宅では、誰かが訪ねてきても外で立ち話をするだけだ。私は仏壇で焼香した後、廊下を挟んだ居間でお蕎麦をご馳走になった。お兄さんの農業仲間のSさんがお線香を上げにやってきた。短いお盆休みが終われば、また誰もいなくなる。Fさんのお兄さんは、「人が帰ってこないから、他所の人を入れることも考えてもいいんじゃないか」と話し始めた。「川内村ではシングルマザーに住む場所と仕事を提供して子供の数を増やそうとしてる」。Fさんは楢葉にできたばかりの作業員の寮を私に見せながら「こんなのがいつの間にか建って…ムショ婦りがいるから気持ち悪くて住めないという人もいますよ」と言った。2016年8月26日、楢葉町民に対する仮設住宅の貸与期間は2018年3月まで1年間の延長が決まった。

帰るべきか帰らざるべきか？

楢葉町の人口は2011年3月11日の震災前は8,042人だった。5年半後の2016年10月1日の人口は7,315人に減っている。楢葉町は2015年9月5日に避難指示解除になった。朝日新聞によれば、2015年10月20日までに321人が町に戻ったが、2016年9月2日の時点で町に戻ったのは681人に止まり、65歳以上が5割を占めている(朝日新聞2016年9月5日)。楢葉町を見下ろす天神山に上ると、水田のあちこちにフレコンバッグに入れた除染廃棄物が並ぶ仮置場が広がっているのが見える。楢葉町では2016年から稲作が再開しているが、田んぼが除染廃棄物の仮置場として使われている現状を見ると、20ヘクタールの規模の稲作の再開は、実質的であるというよりも象徴的な意味を持たされていると考えるのが妥当だろう。5月21日に行われた小規模の田植えに丸川環境相が参加した事実は、この農作業が政治的なショーだったことを示している(朝日新聞2016年5月22日)。田んぼの圧倒的に広い部分が、除染廃棄物の仮置場になっているという事実が、この場所で何が起きているのかを物質的に示している。

8月28日、私はFさんと彼の浪江高校時代の友人Iさんと一緒に富岡町にあるIさんの家を見に行った。Iさんの家は帰宅困難地区の近くの王塚地区にある。我々はまず旧富岡町役場に行った。役場の建物の入り口にモニタリングポストがあり、表示は0.3 $\mu$ Sv/hを示していたが、Iさんによ

ると、ここは何度も除染してコンクリートで遮蔽しているから0.3になっているが、周囲の線量はずっと高いという。王塚集会所のモニタリングポストの空間線量は0.7 $\mu$ Sv/hだった。Iさんによるとここは何度除染しても線量が高いので、土を入れ替え、周囲の草を刈って線量を下げている。その日は雨が降っていたので線量は少し低いとのことだった。Iさんの家に行った時に雨が降っていたので、庭の柚子の木の下で雨宿りをした。するとIさんが柚子の木の根元は4 $\mu$ Sv/h位あると表情も変えずに言うので驚いた。

次に富岡町大字本岡字王塚451の寶泉寺の東隣にあるIさんの知人の家に行った。寺の駐車場とその家の間にある竹藪の放射線量が高いという。一番高いところは4 $\mu$ Sv/h近くもあるので、家主が変わってIさんが再度除染するよう環境省と役場に申し込んでいるという。Iさんは竹藪の地面を指差しながら、ここは一度除染をしたことになっているが「やり方がでたらめだ」と言う。Iさんは清水建設の下請けで除染作業をしていたので、除染のやり方をよく知っている。ここは大林組が除染を請け負っているが、ゴミを取り除いたくらいで除染をしたことになっている。役場で問題を指摘したら、竹を切って、土を削ってフレコンバッグに入れて出しておけば、回収に来ると言われてIさんは怒っていた。「俺は町民だぞ。除染作業員じゃねーぞ。」

そこから大熊町に作られた東電の寮を見に行った。この寮については元榎葉町議で東電の協力会社の社員だったAさんに聞いていた。Aさんの奥さんの姪の息子さんが、東電に就職して大熊町の寮に入るようになったそうだ。東電は福島第一原発から10キロ離れた大川原地区の住居制限区域に750戸の社員寮を作り、避難解除に先駆けて社員を住まわせて、復興に貢献する姿勢を見せようとしているが、Aさんは若い社員をそんな境遇においてとんでもないことをしていると言った。除染が終わる前に、避難している住民の特別宿泊が行われ、東電の社員が社員寮に住むことで、復興が急がれる。私たちが訪れた2日後の8月30日には大熊の社員寮への入寮が始まった。避難指示が解除された榎葉町のJヴィレッジにあった東電の社員寮を大熊町の居住制限区域に移したのだ。

東電の福島復興本社代表は「大川原地区の住民はまだ帰還されていないが、まず私たちが住まわせていただくことで、皆さんの安心につながればと思う」と記者会見で話した（電気新聞 2016年9月1日）。Aさんは、東電に入社して大熊の社宅に住むことになった妻の姪の息子が「誰かがやらなくてはならない」と言ったことに言及して「第二次世界大戦中と同じことを言っている」と嘆いた。東電は若い社員を犠牲にしてはならない。せめて夜だけでも空間線量がより低い場所で休ませた方が良いと彼は考えている。

## 空き家の会話

大熊からの帰り、今年亡くなったFさんのお母さんの実家の前を通ると、庭先に車が止まって

いたので、寄って行くことにした。Fさんの伯父のMさん(83)が裏の畑をトラクターで畝立てしていた。年に3回やれば補助金を貰えるが5回目をやっているという。Mさんは原発事故の後、郡山に娘夫婦と避難している。ここでできる野菜は娘も妻も食べない。自分が作ったキュウリは美味しいから自分一人で食べている。この家に帰って来るつもりはない。そんなことを話しているうちに、Mさんは福島第一原発で働いていた頃のことを話し始めた。前述したように、彼は福島第一原発の建設が始まった時から農業をしながら原発で働いた。工事が始まって足場を組んだ頃は、現場監督が来ない時に山で花札をやり、現場監督が来る頃に戻って仕事をした。最初は東芝の下請け、次は石川島播磨重工の下請けだった。資格がなかったからゴミの掃除や片付けなどしていたが、二年働いてこれじゃダメだと思いクレーンの免許を取った。クレーンの筆記試験は自信がなかったので、試験を受けていた東芝の社員の回答をカンニングしたが、自分の答えと違うので自分が正しいと思う答えを書いた。そしたら合格してしまった。原発の仕事はいい加減で、アラームはピーピー鳴るから止めて途中で置いて行き、戻ってくる時にスイッチを入れた。下請けの男が被曝したことがあったが、日立はこれを隠していた。原発では3,500人か4,000人ほど働いていたが、ほとんどが素人で技術者は一割もいなかっただろう。Mさんたちは原発の定期点検の1週間の間に溶接の練習した程度で、よくわからないまま溶接をさせられたという。隙間をコンクリートで埋めて隠して検査に通ったこともあった。傷があっても「傷はありませんでした」と報告するようまでたらしめた仕事をしていた。こんなでたらしめたことをしているから原子炉がいつか爆発すると言う人もいたという。

するとIさんが原発の中で作業をしていた孫請けの人たちから聞いた話を始めた。東電は津波を問題にするけれども、中で働いていた人たちは、地震が起きた時に配管が上からバラバラと降ってきたので、原子炉は持たないと思って逃げる準備を始めたと言っていた。Iさんは原発の図面を見た時に、免震装置が少なすぎると思ったという。原発内で働いていた人たちの証言と、図面から類推される免震装置の少なさから、Iさんは東電が本当のことを言っていないと感じた。Mさんが唐突に燃料プールにドライバー落としたら、泳いで取りに行った人がいたことを話した。そこからGEから来ていた外国人のダイバーたちの話になった。彼らは線量の高いところで3ヶ月働いた後、国に戻り、一年遊んでから戻って来たという。原発のPR映画では、原発で働く人たちが科学者のように描かれているが、Mさん、Iさん、Fさんによると原発で働く人の大多数は素人で、その仕事は「かなりいい加減」だった。

お腹が減って来たので、Mさんの家をお暇して、お昼ご飯を食べに行くことにした。Fさんの中学の同級生のKさんが嫁いだ四倉の蕎麦屋に行くことになった。Kさんは結婚を機に福島第二原発の立地町である楢葉から、炭鉱の町だった四倉に移ってきた。彼女は最近親族の葬式に出てきたことを話しはじめた。葬式に集まった親族が、賠償金をいくら貰っているかという話になった。ある親族が「2億円貰った」と言うと、別の親族が「それだけ?」と言った。賠償金を全く貰っ

ていないのは、四倉に嫁いだKさんだけだった。Kさんは葬式に集まった親族の金銭感覚がおかしいと思った。

### 不確かな復興と環境の知

福島から帰る前日の8月31日、政府は帰還困難区域に復興拠点を作り帰還を進めるという基本方針を決定した。復興拠点を整備した時点で避難指示を解除するという方針だ。除染については「復興拠点等の整備に当たっては、除染やインフラ整備が確実に行われるよう、国が責任を持って前に進める」、「公共事業的観点からインフラ整備と除染を一体的かつ連動して進める」と決められた（福島民友2016年9月1日）。富岡町でも、大熊町でも、浪江町でも、飯館村でも避難指示解除に向けた特別宿泊が始まっていた。帰還が性急に進められようとしている。その判断に「基準」が使われるのだが、その基準は動いている。基準が使われないこともある。

10月26日、楡葉町の木戸川ではサケ漁が行われていた。漁協ではその日に取れたサケが販売された。以前に楡葉町に住んでいたという年配の男性が、買ったばかりのサケを持って同じ建物の中にある放射能測定室に入ってきた。彼は「自分が子供頃にはサケがたくさん木戸川に上って来たんだ、懐かしいね」などと話した後、「これ今買って来たんだけど計ってくれないか」と役場の職員に言った。農業をしながら役場に勤めるこの職員は「今機械が止まってるんだ」とにこやかに答えた。「いいんだいいんだ」と男は手を振った。この放射能測定室は楡葉町食品等放射能測定事業実施要領に従って運用されている。実施要領によれば、市販の食品の検査は行わない。楡葉町の住民が自家消費する食品が持ち込まれる。私がそこにいた時、柿を持ち込んだ主婦が検査結果を教えてもらって帰って行った。子供の頃に楡葉に住んでいたという男性が買ったサケは検査対象とはならない。彼は町民ではない上に、サケは市販されたものだ。規定により検査対象



写真3. 木戸川で獲れたサケ





写真4. サケの直売所（左）と放射能測定室（右）

とはならないから担当の職員は「今機械が止まってるんだ」とやんわり拒否したのだろう。

10月28日、放射性廃棄物の埋立処分施設としての運用が開始された榑葉町の産業廃棄物の最終処分場の入り口付近の放射線空間線量は0.6から1 $\mu$ Sv/hほどあった。Aさんが私たちをここに連れてきてくれたことには二つの理由がある。一つ目は新聞で見ることができ榑葉町で一番空間線量が高い場所となっている波倉地区集会所の0.3 $\mu$ Sv/hよりも線量が高い場所があるという経験的な事実を伝えること。もう一つは榑葉の産業廃棄物の最終処分場に8,000Bq/kgから10万Bq/kgまでの放射性廃棄物が運び込まれているという事実が孕む矛盾を私たちに理解してもらうことだ。「8千ベクレルの土を運び込んでるのに、この近く道路脇の土は2万ベクレルあるんだから」。除染が終わって避難指示が解除された榑葉町では、埋立処分施設に運び込まれる放射性物質に汚染された廃棄物の基準となる8,000Bq/kgよりも高濃度の汚染された土壌が道端にある。放射性物質に汚染された廃棄物が運び込まれる埋立処分施設の中の廃棄物と避難指示が解除された周囲の土壌の汚染のレベルが同じなのだ。帰還した人たちは放射能を可視化して避ける努力を続けなければならない。被曝はいつしか自己責任の問題になっている。

復興を中心に紙面を組むメディアはこのような不確かな状況については報道しなくなっている。『福島民報』の2016年9月1日の第一面の見出しは「創業、事業進出支援へ」、「国、設備投資2/3補助」。10月29日の第一面の見出しには「相馬福島道路、相馬-保原32年度開通」、「搬送、物流の円滑化期待」などの言葉が並ぶ。このようなアップビートな表現が社会の支配的な雰囲気を作っている。だが、原発事故の前には存在しなかった様々な放射性物質が環境の中で活動している。それは可視化の方法と使われる基準によって可視化されたり不可視化されたりする。榑葉町よりも環境放射線量が高い富岡町や浪江町でも除染作業が終了して、避難指示が解除されようとしている。放射能を可視化し不可視化する基準について、放射能を検出する仕掛けと認識のハイブリッドについて、放射能と言葉の関係について、ドキュメンテーションを続けなければならない。

## 参考文献・映像

- 朝日新聞（茨城版）2016年9月5日「楢葉帰還なお1割未満」.
- 朝日新聞（福島中通り会津版）2016年5月22日「楢葉で稲作再開」.
- 朝日新聞（福島中通り会津版）2015年9月6日「楢葉・道路脇の土壌5万ベクレル超セシウム」.
- 一ノ瀬正樹、伊東乾、景浦峽、児玉龍彦、島菌進、中川恵一 2012.『低線量被曝のモラル』河出書房新社.
- NHK福島 2015.「高木現災本部長が楢葉町を視察」<https://archive.is/kGex8>.
- 環境省水大気環境局水環境課 2016.「公共用水域における放射性物質モニタリングの追加測定結果（速報）（10月－12月分）」平成28年3月29日.
- 電気新聞 2016年9月1日「東電復興本社、大熊社宅に入居開始」.
- 富岡町 2014.「水道水中における放射性物質のモニタリング検査結果（12月分）について」<http://www.tomioka-town.jp/living/cat770/2015/01/002116.html>.
- 日々の新聞社 2014.『このいちねん』日々の新聞社.
- 福島県漁業協同組合連合会 2013.「試験操業対象種の出荷方針」（平成25年12月25日）.
- 福島県漁業協同組合連合会 2015.「産地魚市場におけるスクリーニングマニュアル」（平成27年4月30日）.
- 福島県漁業協同組合連合会 2016.「試験操業漁獲物の検査結果について」（平成28年9月23日）.
- 福島県農林水産部 2014.「農作物の放射性セシウム対策に係る除染及び技術対策の指針」第3版（平成26年4月）
- 福島民報 2016年10月29日「相馬－保原32年度開通」、「28日県内各地の環境放射線量測定値」.
- 福島民報 2016年9月1日「創業、事業進出支援へ」.
- 福島民報 2016年7月26日「いわきと浪江に荷揚げ 原発半径20キロ圏海中がれき回収」.
- 福島民報 2016年6月4日「待ちわびた復活の船出 ホッキ貝試験操業」.
- 福島民報 2014年8月9日「木戸ダム湖底汚染課題 町要求に国は安全強調」.
- 福島民友 2016年9月1日「「帰還困難」の方針決定」.
- 日映科学映画製作所 1967.『黎明－福島原子力発電所建設記録 調査編』.
- 日映科学映画製作所 1971.『黎明－福島原子力発電所建設記録 工事編』.
- 内山田康 2013.「3.11の問い－その場所と時間－」『歴史人類』41: 121-137.
- 内山田康 2014.「異なるスケール、乖離した言葉、隠れたアクター、縫れ」『アジア・アフリカ地域研究』13(2): 148-173.